

室町文化研究序説

埴

叡

はじめに

最近の日本歴史研究の諸分野の中で、文化史の研究はきわめて少い。美術史や思想史に関するものはかなり多いが、巨視的な立場からの研究はほとんどないのが現状である。国際歴史学会議日本国内委員会編の『日本における歴史学の発達と現状VI』（山川出版社）は、一九七八年から八二年までの報告書であるが、その第二章第七節個別分野史をみても思想史・宗教史・民俗史はあるが、文化史の項目は設けられていない。またそのような項目をおくに値する研究に乏しいのであろう。ある時代の文化を総合的にとらえ、その史料を広く求め、再構成することはきわめて困難であるという研究上の問題もある。本稿の課題である室町文化一つをとりあげてみても、その全体像をとらえて日本文化史上の位置を高く評価するのは、多くは日本歴史専攻者ではない研究者である。例えば、上山春平氏と中尾佐助氏は「室町時代は日本のルネサンス」といい、「室町は生活文化の出発点」とも述べている。中尾氏はとくに、日本の花弁園芸・庭園は室町時代に飛躍的發展をとげた¹⁾と評価する。いわゆる和風の生活文化はこの時代におこり、江戸時代に完成したとは古くからいわれているが、この問題を歴史学の立場から総合的にかつ実証的に研究するとすれば、どのような視点ないしは作業仮説を立てるかが第一段階と

なる。次に室町文化を構成する要素をできるだけ多く集めて、その発生その他の社会的関係を史料的に明確にすることが求められよう。本稿は以上のような観点から室町文化をあつかうものである。以上総論では全体の構造を理解するための考察を行い、各論では個々の文化現象をとりあげて、問題のあり方を探ることにしたい。従来茶や花道・能その他の芸能などの個別研究はきわめて多いが、今日の我々の生活に深く影響を及ぼしていると思われる諸現象については研究が少く、好事家的な段階に止まっている。本稿が一步でも研究を進めるのに役立てば幸いと思っている。

A 総論

現代の高校日本史の教科書によれば、北山文化では金閣・臨濟宗・五山文学・能があげられ、東山文化では銀閣・書院造り・枯山水・水墨画・侘び茶・狂言・連歌・御伽草子などが列挙されている。研究史的には東山文化に関するものはたくさんあるが、北山文化のそれはほとんどない。雑誌『日本歴史』（吉川弘文館）の目録をみても見当らないほどである。東山文化に対する評価はかなり早くから見出されるという。（『山上宗二記』あたり）北山時代の事を論じた早い例は、恐らく三浦周行氏あたりであろう。すなわち昭和五年一月の『仏教美術』一七号にのせた「桃山時代美術の先駆」において氏は次のように述べた。「それが織田豊臣時代の趣味と共通のものあるを思ふにつけて、かねて一つの疑を抱いてゐる事は、斯る濃厚華麗な色彩や金銀に対する時代の好尚が、何故東山時代に対して北山時代ともいふべき義満の時代の絵画に反映せなかつたかといふ一事である。」²⁾周知のように、内藤湖南は『日本文化史研究』で「大体今日の日本を知るために日本の歴史を研究するには、古代の歴史を研

究する必要は殆どありませぬ。応仁の乱以後の歴史を知っておつたらそれでたくさんです。それ以前の事は外国の歴史と同じくらいにしか感ぜられませぬが、応仁の乱以後はわれわれの眞の身体骨肉に直接触れた歴史であつて、これをほんとうに知っておれば、それで日本歴史は十分だと言つていいのであります。」とのべた。³⁾ さきにあげた教科書の内容を見比べても北山文化は見劣りがするのであるが、のちにのべるように、北山文化は東山文化と対になつてはじめて室町文化を構成すると考えられるので決して無視はできない。今後研究を深化させて行く必要がある。

次に室町文化の重要な部分である庭園、その代表ともいえる竜安寺の庭について、室町時代の実相を知ることにはなかなか困難である。寛政一年（一七九九年）秋里籬島の著わした『都林泉名勝図会』⁴⁾の挿図によれば、白砂を敷いてある庭を数人が扇などを持って歩いている。ほうき目をつけられた縁側からみる石の庭ではない。現在の姿が室町時代のそれであるとははっきりいえない点がある。また西芳寺の庭についても、応永二七年六月一六日これを見た宋希璟によれば、池の三面に花木を植えたり、池中の三島には小舟で往来するなどかなり派手な作りであつたらしい。⁵⁾ また侘茶の始祖といわれる珠光にしても、その事蹟は必ずしも今日明らかではなく、狂言はいわゆる天正本より古いものはない。お伽草子については、在外奈良絵本の調査などは進んでいるが、文学的研究はあつても成立年代のたしかなものはないのが現状である。

以上室町文化の研究が歴史学上問題点が多いことを一応確認した上で、次に室町文化のおかれた歴史的条件は何かを考えてみたい。

日本列島は地理的にはユーラシア大陸の縁辺に位置し、大陸から孤立しているが、それにもかかわらず、いやそれ故にこそ大陸からの影響を受けやすい歴史的存在であつた。対外関係を無視しては日本歴史は語れ

ないのである。室町時代を考えるに当たってもそれは当然考慮されなければならないが、その前に日本文化の発展全般に目を向けて、その歴史的条件を考究することからはじめたい。そこでやや図式的に過ぎるくらいはあるが、いくつかの項目による段階を設定してみた。まず第一は国際的危機ないしは戦争である。第二はそれを受けて国内では政治的対立や混乱、ばあいによつては内乱が生じる。第三は必ずしも時間的にみて第二のあとにおこるとは限らないが、神国思想（適当なことばがないので仮にそう呼んでおく。）がおこる。高麗は一二五九年に元に服属するが、それを契機として檀君神話が唱えられるようになるのもその一例であろう。第四は圧倒的な国力をもつ相手の文化に対する強烈な憧憬が生じ、外国文化の摂取がはじまる。第五段階ではその反動として、伝統的な文化と外来文化との融合を含めたあらたな国風文化発達の時代が来る。以上のような大ざっぱな経過をたどつたと考えられる事例として五つをあげたい。（イ）六六三年の白村江の戦いのあとの歴史的展開がまずあげられる。国内の混乱としては壬申の乱（六七二年）があり、国号の倭をやめて「日本」を採用する。記紀とくに日本書紀の編纂は対中国関係を強く意識してのものであつたに違いない。天平から平安初期にかけての時代は唐文化の受容に熱中した。遣唐使停廃以後の平安時代は典型的な国風文化の時代であることはいうまでもない。（ロ）蒙古襲来は世界史上の大事件である。モンゴルの征服の範囲が、西はドイツのチューリッゲンの森あたりまで、東は東シナ海、日本海で止まったことは、のちの世界史に重大な影響を及ぼしたという卓見がある。すなわちモンゴルの勢力のおよばなかつた西ヨーロッパや日本には封建社会が発展し、一方モンゴルの版図のあとには専制政府が成立して、現代におよんでいるという見方は極めて興味深い。日本国内では鎌倉幕府が滅亡して、南北朝の内

乱がおこり、北畠親房が『神皇正統記』において「大日本者神国也」とのべ、「我國のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此故に神国というなり」と説いた。足利義満は明の太祖に朝貢を誓い、五山などを中心に中国文化をとり入れた。北山文化時代のことである。それに対して、日本の伝統文化をかえりみて中国一辺倒から脱却したのが東山文化であり、日本生活文化の成立と評価されている。(ハ)一五四三年の鉄砲伝来にはじまるポルトガル・スペインの来航は、キリスト教の伝道を伴うが故に政治的危機であるとともに文化的危機でもあった。信仰をめぐる戦国大名をはじめとして対立がおこった。豊臣秀吉の「日本は神国たるころ……」ではじまる宣教師追放令から鎖国への過程が、それに対する政治権力の出した解答であった。しかしこの時代の特徴は、南蛮諸国の現実の侵略を受けたのではない所から、南蛮文化の同時並行的摂取があり、鎖国体制成立後の文化摂取は中国の朱子学をはじめとする中国・朝鮮文化の流入であった。「から」ころをきよくはなれ」ようとする本居宣長の国学はその反動であるが、ここで注意すべきは国学者が必ずしも蘭学を排斥していない点である。江戸時代における蘭学の性格は改めて考えねばならないと思う。(ニ)幕末の欧米列強の開国強要は植民地化の危機であった。それに対応しておきた攘夷思想と運動、開国派との抗争はシビル・ウォーである戊辰戦争をひきおこした。列強が局外中立を解除して維新政府を承認するや、ヨーロッパ文化の摂取は文明開化の風潮を生み出す。万世一系の世襲的天皇を頂点とする明治二年の大日本帝国憲法の発布、二三年の教育勅語発布はそのような風潮に対する反作用であろう。(ホ)一九四五年の敗戦に続いておこった極端なアメリカ一辺倒についてはいまさらのべるまでもないであろう。安保闘争はそれに対する反発であるが、農地改革、教育改革などは占領政策の遺したもつとも大

きい影響である。以上の各過程にはそれぞれ時代的個性があり、単純な図式をもってしては包括できない事象がきわめて多いが、巨視的には対外関係のひきおこす波紋が国内の混乱を生み、文化摂取に熱中する現象と、それに続く国風文化の成立という点ではほぼ同じような経過をたどっていることが指摘できよう。以上のべたことを表にして示せば、次のようになる。

階	段	時		1	2	3	4	5
		事	項					
		古代	白村江の戦い	元寇	南北朝時代	神皇正統記	天平・平安初期文化	平安後期文化
	室町		キリスト教伝来	戦国時代	戊辰戦争	鎖国	朱子学	江戸後期文化(国粹思想)
	幕末	明治	開国	敗戦	占領による混乱	攘夷思想	文明開化	経済大国
	第二次大戦後					安保闘争	アメリカ文化	

ところで「日本文化発展の歴史は、じつは危機の歴史だった。」とのべ

て、外国文化の流入は戦争がその契機となったと説いたのは鈴木治氏であった。⁹⁾そして日本史上それは四回あるとし、(1)飛鳥・白鳳・天平時代、(2)戦国末から徳川初期のキリシタン文化、(3)徳川後期から明治にいたる西欧文化、(4)昭和二〇年以降のアメリカ文化の流入をあげた。筆者の考えときわめて近いわけであるが、室町文化は入っていない。元寇という日本史上最大の危機の後で日本文化を代表する室町文化が成立し、第二次大戦の敗戦と被占領という屈辱的事件を経て、欧米技術よりぬきん出た現代日本の科学技術が誕生した。この二つこそが現代日本の国家および日本人の世界の中におけるきわだった個性であるといえるのではない。さいごに室町時代の国際的条件を整理し、多少の私見をつけ加えた。明との関係では、第一に明は日本を「不征の」国と規定したことである。北方諸民族との対決に苦勞した明王朝は、遠くかつ孤立した国についてはたとえ問題が生じてでも征服しないという立場をとった。第二は足利義満がうけいれた明への臣属という形式をとった勘合貿易体制である。中国文物への要求が強かったことは、四代將軍義持が一旦やめた貿易を、六代義教のときに再開せざるを得なかった点にも現われている。さらに元・明と日本との文化交流であるが、まだ我々の知らない多くの文化が日本に流入してきたと思われる。元史や明史の研究は我々の知る限りこまかい文化現象にまで及んでいないため、史料的に明らかにすることは困難である。今後の課題とするほかはない。ところで倭寇であるが、ふつうは一四世紀なかばからおこり、勘合貿易がその鎮圧の一つの目的としてはじめられると下火になったと考えられている。しかし最近の研究によると、倭寇は勘合貿易体制とほとんど無関係に続き、別の理由で衰滅しているのである。すなわち一五世紀になっても倭寇は少しも衰えず、一四七六年のばあいは一三七隻の規模をもつものであった。義

持は一四一一年明使の入京を禁じ、一四三四年義教は貿易を復活したが、この間はいえ倭寇の回数は減っているのである。一五世紀の倭寇を鎮圧したのは、明の優秀な火薬と火器、それと明に対する朝鮮の協力による情報の提供であった。⁸⁾同様に一六世紀後半に再びさかんになったいわゆる後期倭寇も、大内氏による勘合貿易が一五四七年に終わったからというよりは、中国人を主力としていることから考えても、多くは明自体の政治状況がそれをひきおこしたと考える方が当を得ているのではあるまいか。一方李朝初期に司訳院は中国語だけを学習したが、のち蒙古学・倭学・女真学（のち清学）を加えた。⁹⁾李朝のおかれた国際条件をよく示していると思われるが、このうち倭学の採用は一四一五年という時期から考えて、高麗をほろぼした倭寇の脅威が日本語学習にふみきらせたのではないか。さらに憶測を加えれば、世宗（在位一四一八―一五〇）の時代、一四四六年に訓民正音（ハングル）を公布したことも、日本語の影響なども含めて危機的な時代の産物と解釈することも可能であろう。それはともかく、室町政権には倭寇を鎮定する軍事力はなく、それ故にこそ明との正式の関係を樹立して、国内統一政権の地位を得ようとしたに違いない。以上のような東アジア世界の情勢下に開花したのが室町文化であった。

B 各論

ここでは文化を構成するこまかい要素について、ごく一部分に過ぎないが、従来あまりとりあげられていない面についてのべたい。

(イ) ひらがな

「仮名又は平仮名と呼ぶ」とロドリゲスの『日本大文典』（慶長九―一三年、一六〇四―一〇八）¹⁰⁾にみえるのがもっとも早い例であるとされてい

る。また中世の辞書で平仮名をさいしよによりがなとして用いたのは、キリシタン版『落葉集』¹¹⁾とされている。ふつう平仮名といういい方が使われるようになったのは室町末期であると説かれているが、それを示す適確な史料はない。『サルバートル・ムンヂ』¹²⁾のおもて表紙とうら表紙の裏打ちに使われた印刷反故は漢字交り片仮名であり、本文は連綿体平仮名であるのは、片仮名から平片名への途を示しているようにみえる。『中世法制史料集』第二巻¹³⁾にみえる次の法令がある。(1)東寺々内商人通行禁制、応永三年(一三九六)一〇月一二日、(2)撰銭事、永正三年(一五〇六)七月二二日、(3)徳政条々、享祿四年(一五三一)九月一七日、(4)徳政条々、永祿五年(一五六二)三月一八日、以上の法令はいずれも多少は漢字がまじるが、大部分は平仮名で書かれているのが目につく。とくに(4)はほとんどひらがなで、かえってわかりにくいくらいである。以上例は少ないが、庶民を対象にした徳政・撰銭等の内容のものは平仮名が用いられていることに注目したのである。ひらがなということばの意味は明白ではないが、平生用いるかなというほどの意味であろうか。漢文のそえものとして用いられるカタカナとはちがった形式ばらない仮名のよび名ではないか。のちに明治時代になって、カタカナは憲法・勅語・法令・公文書など正式のものに使われるようになる。中世では『貞永式目』が寺院の教育の手段としてよく使われたが、ここに『平仮名式目抄』という三冊の写本がある。¹⁴⁾この写本の年代が室町時代であれば、平仮名ということばの初見史料となりうるのであるが、残念なことに筆写の年代、筆者名ともに不明ということになっている。

(四)教育

中世の代表的教科書である『庭訓往来』の写本については、伝経覚筆のものが文明五年(一四七三)以前とされている。¹⁵⁾最近さらに時代のさ

かのぼる写本が発見されている。それは島根県出雲市の神門寺(かんどじ)写本上下二巻で、下巻奥書によると「至徳三年(一三八六)霜月三日豊前寺朝英書之」とある。¹⁶⁾これによって南北朝時代から教科書として用いられたことがうかがわれる。このほか計算のことでは「九九」があるが、周知のように古代から「九九―八十一、八九―七十二」となっている。幼い子らに寺院で教えるばあいは「二二が四」からはじめたと思われるが、その方法がいつごろからなのかを知りたいところであるが、不明である。

(イ)そろばん

そろばんの素朴なものは古代エジプトのアバクスから漢代やローマ時代のものがあるといわれるが、現在用いられているものの直接の祖先は元に発して明を経て、日本に至ったと考えられている。八重山列島の一つ小浜島の方言で「しなばん」とよばれている。¹⁷⁾慶長一七年(一六二二)に明人が長崎に算盤をもたらしたといわれるが、¹⁸⁾確証はない。製作地としては大津が江戸時代の初期から著名となる。なぜ大津なのかについては、瀬戸内海の水運と淀川水系のいきつく所であったという推定が可能であろう。琵琶湖岸の堅田の漁民は、瀬戸内の海民が淀川水系をたどって宇治川をさかのぼり、定着するに至ったという推定もある。¹⁹⁾そろばんに限らず、文化伝播の道としてもっとも重要であったにちがいない。

(ニ)明朝体

山口県吉賀(豊浦郡菊川町)の快友寺には、南京報恩寺版の経文が所蔵されているが、その中の一つ『慈悲道場懺法』には明の嘉靖一四年(一五三五)の刊記があり、その字体は明朝体へあと一歩という段階のものと評価されている。²⁰⁾今日我々がみなれている活字の字体は横の線が細く、縦の線が太く、横の線の端に三角形のいわゆる鱗をもつのが特長であり、

明朝体の日本への渡来は明僧隱元の来朝がきっかけであることは有名である。しかし、明の正徳・嘉靖年間（一五〇六―一六六六）に成立したといわれる初期の字体のものが室町時代にすでに流入していたのである。

(ハ) 看板

看板の起源は古代にあり、関市令第廿七には「凡そ市は肆（いちぐら）毎に標立てて行名題（しる）せ」とあり、いちぐらは店舗で、行名（ぎょうみょう）は商品の名称である。中世になると、「一遍聖絵」にわらじを地面につきさした棒の上に展示したものがみられる。²²⁾これは看板以前の商品展示方法の一つであろう。正安元年（一二九九）のころである。中国史に目を向けると、金支配下の華北で「望子」（ワンツ）、「幌子」（ホァンツ）とよばれる酒屋のはたじろしやふきながしが出現している。室町時代になると、『黒本本節用集』には「範板額―書寺名板也」とみえてい²³⁾る。天文一七年（一五四八）ごろに成立したといわれる『運歩色葉集』には「簡板」とあり、²⁴⁾このあたりが江戸時代の原形と考えられる。川原慶賀筆の『職人尽し図』の中にある「額看板判木細工所」に至ると、額と看板ははっきり分離している。次に材料である板については、大鋸（おが）引きによる大量の板の製造がこの時代から行われはじめたことに注目しなければならない。大鋸の採用については、木材供給量の減少が前提としてある。大鋸に関する史料は「教王護国寺文書」応永二〇年（一四一三）が知られているから、中国から伝来したのは一四世紀のことかも知れない。なお大鋸による挽板の遺材が近江長寿寺にあるという。（滋賀県甲賀郡石部町の白山神社拝殿の「歌仙絵板」）²⁶⁾大鋸は二百年ほど用いられるが、現存するものは少く、最近発見された静岡県加茂郡河津町の旧家所蔵のものを含めて五例を、村松貞次郎氏は報告されている。²⁷⁾さらに板の量産が可能になった結果、ひき出しを持つ家具が広く作られる

ようになるが、たんすもその一つで、元来はたんし（担子）²⁸⁾で、簞は竹であんだ円いめしの容器、笥は四角な容器であった。たんすはその名称とともに日本独特な衣服のための家具となった。そして床の間の押板（おしいた）も製材の発達史の中に位置づけて考えねばならない。²⁹⁾さらに舟底の板である敷（しき）または航（かわら）と太い梁で構成する船体がこの時代に生まれたのも、板の製造技術と深くかわっている。

(ニ) 蔵書票

もつとも古いものは、一四七〇年ごろと思われる醍醐寺光台院の所蔵するものといわれる。³⁰⁾ヨーロッパに現存する最古の蔵書票（エクスリプリス）はドイツにあり、奇しくも一四七〇年ごろで日本と同時代である。ただしドイツのものはハリネズミを画いているが、日本のものは文字のみである。

(ト) 内畳染め

うちぐもぞめは打畳とも書かれるが、短冊の下地の模様的一种で、上の部分は青、下は紫色がふつうである。この時代の後期に作られはじめたとされる。最近発見された史料としては、宮城県河南（かなん）町の真言宗箱泉寺所蔵の後柏原天皇直筆の短冊がある。³¹⁾

(チ) 金魚

文亀二年（一五〇二）にはじめて明から泉州の堺あたりに渡来したとされ、江戸時代の寛延元年（一七四八）の序をもつ安達喜之の『金魚養玩草』（きんぎょそだてぐさ）の記載が初見である。³²⁾

(リ) 植林

京都府葛野郡小野村の日下部彦之丞は、一五三三年ごろ、杉・ひのきの植林をはじめたという。³³⁾また北山丸太で知られる北山杉や、吉野杉もこの時代に植林が開始されたという。現在琴の材料として用いられるキ

りは、会津から南部の山間部に育った古木がよいとされ、室町時代に遠野南部氏が大和から苗を移植したことにその起源をもつ。³⁴⁾

(ヌ) そうめん

最近発見された史料では、「鰯庄引付」応永二五年（二四一八）九月一五日の条に「サウメン」とあり、同じく永享五年（二四三三）五月晦日の条には「素麺一貫文」とある。³⁵⁾その他にすいとん・きしめん・きんとん・納豆・こんにやく・さとうようかん（享禄元年—一五二八）・みそ汁の普及（一四七〇年ごろ）・おやつ（習慣・フグ料理のはじめ（一五四〇年代））、それに戦陣食であるにぎりめし（屯食）の普及があげられる。

(ハ) 醤油

醤油の出現は一五二一年ごろといわれるが、一二二八年紀州由良の興国寺の僧覚心が中国から径山寺きんざんじみそをもたらし、これからのちに醤油が分離し、現在でも和歌山県の湯浅で製造法を受け継いでいるという伝承がある。湯浅から一五三五年赤桐善右衛門によりはじめて大坂にもたらされたとも伝えられているが、それを示す史料はない。しかし伝承は尊重されるべきであろう。『黒本本節用集』には「醬タレミソ」とあり、タレミソは垂味噌のことで、みそに水を加えて煮つめ、袋に入れてしぼり調味料としたもので、このあたりにしょうゆの源流の一つがあると思われる。現在までのところ、醤油という文字の初見は慶長二年（二五九七）の『易林本節用集』とされ、また『四条流庖丁間書』（長享三年—一四八九）には垂味噌・うすたれのことがみえるという。³⁶⁾

(ヲ) 三味線

琉球の三線は永禄五年（一五六二）に堺に伝わったといわれる。日本音楽の代表的楽器であるのに、伝来の事情やその後の経過ははっきりしないのである。鹿児島県坊の津に「ごったん」とよばれる三味線の前身

とも思われる楽器が現在する。また侗琵琶（とんびわ）とよばれる楽器も三味線の源流の一つと考えられている。撥は日本独特のものであり、三味線の成立に琵琶法師が介在していることはたしかであるといわれる。

(ヅ) その他

(1) 油煙墨 『明応本節用集』には「油煙ユタン—墨名」とある。現在も用いられている墨は、一五世紀に興福寺二諦坊で作られはじめたという。(2) うちわ 山崎宗鑑の『犬筑波集』に「月に柄をさしたらばよき団（うちわ）かな」とみえるうちわは、『明応五年版節用集』には「団扇—ダンセン」とあり、『黒本本節用集』では「ウチハ」となっている。(3) 豆腐 凝固剤としてニガリをいれるものと石膏をいれるものがあり、日本のとうふは北中国・朝鮮とともに前者に属する。(4) 入浜式塩田も『文正草子』などによると、室町中期からという。(5) 福神信仰や東南アジアから伝来した間道（かんどう）ともいわれる縞もよう、遣戸の普及、備後砂を使った盆石、軒瓦の落ちるのを防ぐ掛瓦もこの時代からといわれている。

(カ) 塔頭

「たっちゅう」ということは日本で作られた漢語である。例えば応永八年（一四〇一）の史料にみえ、明応五年版の『節用集』にも「タツチュウ」とあり、また塔主については「塔頭之房頭之主也」と記す。さらに『運歩色葉集』にもみえる。僧侶が自分の師の墓のそばに小庵を結んでそこに定住し、本山の行事にはそこから出て行くといった慣行が室町時代からはじまった。良き師匠を求めて放浪した、つまり弟子の方が師匠を選んだ鎌倉時代と異なり、師匠の方が見込みあるものを弟子にしたのであった。塔頭ができれば、家の中のしつらえがなされ、縁前の庭なども作られるようになる。この時代の定着性は大きな特色であり、

農村・漁村への定住、都市の成立もこの時代の特長といわれる。塔頭の成立とそれに伴う生活文化も大きな流れの一つといえるかもしれない。とくに都市の発展は各分野にわたる文化の発達からみて、日本史上はじめて日本文明（文化複合体）が成立したと称しても過言ではない。

おわりに

室町時代を含めた日本文化史全体を一応視野に入れて考えてきたのであるが、二・三言及しなかった点があるので、ここでのべておきたい。先にのべた仮説を考えたときに、では鎌倉時代の文化をどう考えるかということが問題となった。それは最後まで残された形になってしまい、明確なビジョンを示すことができないで終ることになった。次に江戸時代であるが、膨大な量をもつ（としか今いいようがないので）江戸文化全体をどう把握するかということも将来の課題となった。従来の常識的理解では、寛永文化とか、前半は上方（元禄）文化がさかんで、後半は江戸中心の化政文化の花が咲くというのが通説であろうが、それではたしてよいのかという漠然とした不満もある。もちろん室町文化の全体像についても、本稿ではきわめて大ざっぱな仮説を提示しただけで、個々の分野の細かい分析と実証によってその仮説を確認する段階までには至っていないのであるが、さいごに文化史と時代区分との関係であるが、古代では奈良時代・平安時代という都城の移転による分け方や、貞観・藤原など美術史上の時代区分は必ずしも適当でないことが予想される。室町時代のばあいはもちろん南北朝時代をぬかしては考えられないが、終りは一五七三年の室町幕府滅亡という政治上の区分より、むしろ鉄砲伝来以前と考える方がよいのではないか。安土桃山と江戸とをいっしょにするのはちよつと暴論で、反論も多いと思うが、政治上上の区分

と文化史上の区分とがぐいちがつてもすこしもかまわないのではなからうか。室町時代に実に多くの面において文化の花が開き、かつその成果が次の時代に継承発展させられた根本の原因は何かという難問をかかえつつ、本稿をとじることにしたい。

以上

註

- 1) 『日本文化の系譜』、徳間書店、一九八二年
- 2) 『日本史の研究』新輯三、一八三〜一八七ページ、岩波書店、一九八二年
- 3) 『日本文化史研究』下、六四ページ、講談社学術文庫、一九八四年
- 4) 足田輝一『樹の文化誌』、三三二ページ、朝日新聞社、一九八六年
- 5) 『新訂老松堂日本行録』、九六ページ、続群書類従完成会、一九六八年
- 6) 『白村江』、二二ページ、学生社、一九七二年
- 7) 魏榮吉『元・日関係史の研究』、教育出版センター、一九八五年をみても、「元代文化の東伝」という章はあるが、そこでのべられているのは中国僧侶の渡来や入元僧、仏典の輸入などに限られている。
- 8) 有井智徳『高麗李朝史の研究』、四三六、四四〇〜四四二ページ、国書刊行会、一九八五年
- 9) 安田章『朝鮮資料と中世国語』、一九〇ページ、笠間書院、一九八〇年
- 10) 土井忠生訳注『日本大文典』、二二二ページ、三省堂、一九五五年
- 11) 大英図書館所蔵
- 12) ローマ、カサナテンセ図書館所蔵、『南欧所在吉利支丹版集録』、雄松堂、一九七八年
- 13) 佐藤進一・池内義賢編、一九三、一一一、二五五、二六六ページ、岩波書店、一九七八年
- 14) 東京大学図書館所蔵
- 15) 石川松太郎校注『庭訓往来』、三四二ページ、平凡社東洋文庫、一九八二年
- 16) 毎日新聞一九八二年一月六日の記事による。
- 17) 東条操『全国方言辞典』、四二八ページ、東京堂、一九八五年
- 18) 鈴木久男『古そろばんの研究』、二七四ページ、富士短期大学出版部、一九七三年

- 19) 『朝日百科日本の歴史20、琵琶湖と淀の水系』にのせる今谷明氏の「湖に生きる人びと」による。
- 20) 竹村真一『明朝体の歴史』、七九ページ、思文閣出版、一九八六年
- 21) 『律令』、日本思想大系3、四四四ページ、岩波書店、一九七七年
- 22) 『日本常民生活絵引』第二巻、一五八ページ、平凡社、一九八六年
- 23) 尊経閣文庫本、白帝社、一九六七年
- 24) 静嘉堂文庫所蔵、一一五ページ、白帝社、一九六一年
- 25) ライデン国立民族学博物館所蔵
- 26) 今谷明「中世民衆の生活と歴史教育」、『歴史地理教育』、一九八五年六月号
- 27) 村松貞次郎「水軍の大鋸(おが)」、『学鑑』八三巻八号、一九八六年八月号、丸善
- 28) 『運点色葉集』、一四三ページ、「タンジ」とある。
- 29) 同右、九六ページ
- 30) 樋田直人『蔵書票の美』、五二ページ、小学館、一九八六年
- 31) 『月刊文化財発掘出土情報』、一九八六年八月号、一四ページ、ジャパン通信社
- 32) 矢野憲一『魚の文化史』、二二三ページ、講談社、一九八五年
- 33) 帝国森林会編『森林学』、五三〇ページ、共立出版、一九七八年
- 34) 満久崇麿『木のはなし』、一〇一ページ、思文閣出版、一九八五年
- 35) 兵庫県揖保郡太子町斑鳩寺所蔵
- 36) 油井宏子「醤油」、『講座日本技術の社会史―農業・農産加工』、一七〇、一七三ページ、日本評論社、一九八五年
- 37) 『大日本史料第七編之五』、五〇ページ、東京大学出版会

(補註1)

九九―八一からはじまる九九(くく)は、一〇世紀の『口遊』(くちずさみ、真福寺本)にみえることはよく知られ、一五世紀の『拾芥抄』にのせるものも順序は同じとなっている。ロドリゲスによると、九九―八一にはじまるものを「日本人の使ふ日本の九九」とよび、一一が一にはじまるものを「我々と同じやうに使ふ別の九九」という。『日本大文典』、七七一ページ)日本に現存する、明で刊行された珠算書の最古のものは、一五七三年の『盤珠算法』であり、上下二巻から成っている。(内閣文庫所蔵)その中に「初学累算数法」という項目のところに「〇二二単四、二三如六」にはじまり、「〇二三如六、三三単九」と

いうように並べてある。本文ですでにのべたように、九九から二二が四へいつ転換したのか、また日本で独自にはじまったのか、そしてここにあげた史料のように、明からの影響を受けてはじまったのかは不明であるが、興味深い史料ではある。(児玉明人編『十六世紀末明刊の珠算書』、富士短期大学出版部、一九七〇)

(補註2)

B各論の(二)明朝体のところでのべた快元寺は、口伝によると慶長一〇(二〇)年ごろ毛利藩家老職桂広繁が菩提寺として建立し、その後母を亡くしたさい、そのころ長崎に中国から「一切経」が流入したが引き取り手がないので同寺に収めたといわれる。正徳四年(一七一四)、文政二年(一二二八)の大火で本堂・庫裡を焼失したが、山門・経蔵は残ったという。桂太郎の菩提寺として知られている。(同寺住職西尾龍舟氏の御教示による。)

(補註3)

一九七一年の『古典籍下見展覧大入札会目録』に「伊呂波字尽」という書名がみえ、「室町期の写本で、ふりがなはひらがな」と記されているという。もしそうならば、『落葉集』より古いひらがなの辞書ということになるが、その所在は現在(一九八六・一一月)不明である。

(補註4)

土佐光信が画いた『星光寺縁起絵巻』(二四八七年、東京国立博物館所蔵)には筆のかんばんと思われるものがみえる。